4 高プロラクチン血症を呈しクエチアピンへの置換が有用であった統合失調症の一例

青木 庸子・村山 賢一・千葉 寛晃
新藤 雅延・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野*

Perospironeは抗ドパミン作用とともに抗セロトニン作用を併せ持つ抗精神病薬で，副作用が少なく，陰性症状を前景に持つ慢性期の統合失調症に対する有効性が高い．Quetiapineは5-HT2レセプターに高い親和性を示し，陽性症状のみならず陰性症状にも有効である．EPSの発現が低く，プロラクチン濃度を上昇させないという特徴がある．今回，我々はperospirone投与中の統合失調症患者において，高プロラクチン血症を呈したためquetiapineに置換し，良好な結果を得たので報告する．

本症例ではperospironeにより，音への過敏性は消失，自生思考，うつ気分も軽快．母への恨みは薄らぎ，頭重感からも解放され，退院への意欲が見られるようになった．音への過敏性，自生思考，恨み，頭重感などの陽性症状，引きこもりなどの陰性症状，うつ気分などの神経症様症状に対し，perospironeは有効であったと考えられた．本症例では月経初来以来，生理不順．Perospirone投与により，プロラクチンの分泌が促進され，視床下部－下垂体－卵巣系の相互調節機能の乱れを強めた．今回の測定データはピークに近いプロラクチン値を測定した可能性がある．血中プロラクチン値が常に高濃度ではなかったために，無月経にまでは至らなかったと考えられる．Quetiapine投与により，プロラクチン値は上昇せず，不正出血は消失し，月経が再開した．Quetiapineはプロラクチン濃度を正常化させると考えられる．本症例ではquetiapine置換後，社会性，活動性が高まった．Quetiapineは陰性症状に対して，有効であると考えられた．Quetiapineを750mgまで増量し，4週間継続したが，イライラ感は持続した．QuetiapineはD2レセプターへの親和性は高くはなく，緊張，解体などの陽性症状に対する効果は十分でないと思われた．

5 Olanzapineが著効し単剤投与可能となった統合失調症初発エピソードの一例

新藤 雅延・村山 賢一・青木 庸子
千葉 寛晃・染矢 俊幸*
新潟大学医学部附属病院精神科
新潟大学大学院医歯学総合研究科精神医学分野*

統合失調症に対しては抗精神病薬が用いられるが，特に初回エピソードにおいては非定型抗精神病薬が第1選択薬であるとされる．今回我々は薬剤副作用や効果不充分のため非定型抗精神病薬の選択に苦慮した統合失調症初回エピソードの症例を経験したので報告する．症例は22歳の女性であり，当科受診時には幻覚・妄想状態で解体症状も著明であった．risperidone（Max 6mg）により治療開始したが，錐体外路症状が出現したため第13病日からbiperiden（Max 4mg）を併用し，錐体外路症状は改善した．以後も不穏状態は治まらず，第22病日からは鎮静のためlevomepromazine（Max 200mg），lorazepam（Max 3mg）を追加投与した．その後は不穏も治まり解体症状も著明に改善したが，高PRL血症（170ng/ml）を認めたためperospirone（Max 48mg）への置換を第42病日より開始した．置換後も幻聴は残存していたものの，解体症状の増悪は無くPRLは正常値となった．精神状態が安定していたためlevomepromazine，lorazepamを第68病日より漸減したところ，第88病日に幻聴が悪化し不穏となり，解体症状も増悪した．このためperospirone単剤での治療は困難と判断してolanzapine（Max 15mg）への置換を開始した．置換後に不穏状態は速やかに治まり，幻聴・解体症状についても改善を認めた．ただし8週間で4kgの体重増加が認められた．他には特に薬剤の副作用も目立たず，併用していたbiperiden，levomepromazine，lorazepamを漸減中止したが，副作用の出現や症状の増悪を認めなかった．その後も安定した状態であったため第147病日に退院した．